

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 4 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370070

研究課題名(和文) 近世日本における暦学の展開と暦の流通に関する宗教社会史的研究

研究課題名(英文) History of socio-religious study about the development of astronomy and the distribution of calendars in Edo period

研究代表者

林 淳 (HAYASHI, MAKOTO)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：90156456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)： 近世には4回の改暦が幕府を中心におこなわれ、暦が全国に流通した。9世紀の改暦以来、長い空白があり、1685年貞享改暦をなされた。貞享改暦が企画された背景には、渋川春海の復古的な国家観があった。渋川によれば、神武天皇が古暦を作成したが、それが失われて、その後に中国暦が伝来した。中国暦をそのまま日本で使うことは、中国の文化的な属国になることを意味するという。貞享改暦以降、暦が全国統一されて、流通したことによって、暦の知識をふまえた暦占・易占が出版というかたちで民衆世界に広がった。また仏教天文学は、暦学の進展にともない近世後半に宗派をこえた思想運動になった。

研究成果の概要(英文)： The transformation of calendars was performed 4 times during Edo period. Making calendars contributed to spread knowledge concerning calendars among people throughout the country. There was a long blank of the transformation of calendars since the 9th century until 1685 when Jokyoreki was issued. Shibukawa Harumi who had made Jokyoreki had nationalistic views which were characterized as Shintoism. According to Shibunawa, Emperor Jinmu made the oldest calendar, but it was lost, and after it, Chinese calendars were introduced to Japan. For him, using Chinese calendars means being colony of Chinese cultural imperialism. After Jokyoreki, popularity of calendars brought about new types of calendars which were invented in many different ways. We should pay attention to Buddhist astronomy which was spread beyond individual sects throughout the 19th century.

研究分野：宗教学

キーワード：貞享暦 渋川春海 陰陽道 土御門家 古暦 仏教天文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、近世の陰陽道と暦の研究を専攻している。陰陽道研究は、10世紀前後に貴族の家職の一つとして成立したことが提唱されて以来、日本史の部分として展開して時代ごとの成果を生み出してきた。しかしメイド・イン・ジャパンが強調され過ぎたために中国、朝鮮の道教、風水、民俗信仰との比較研究は少なくなった。厳密な史料批判をへた論文が多くなったが、比較の視野が失われたといえよう。中国、朝鮮との比較をするためには、陰陽道があるののかないのかという議論をせずに、かつての陰陽寮の職掌であった暦・天文を前景化して、他地域との比較を行いたいと考えて本研究をはじめた。暦・天文は、科学史研究者の成果もあるが、そこでは陰陽道が軽視される。他方で陰陽道研究者は、陰陽道を「呪術宗教」と考えているため、陰陽道と占の法則性・合理性を見ようとはしなかった。

(2) 近世の宗教史と思想史との間に架橋を試みることは一つの課題であった。宗教史のほうは、寺院史、修験道史、陰陽道史、神道史とかなりの進展がありながらも、思想史とのすりあわせは、ほぼなかったといえよう。ところが貞享改暦の例をとってみても、作成した渋川春海、土御門泰福は山崎闇斎の門下であった。闇斎じしんが改暦の手伝いをおこなっていたし、闇斎門下のネットワークを通じて改暦の名声は広がっていった。闇斎研究のなかでは、貞享改暦や渋川のことは触れられることは少ないが、暦と思想史の関係を追究したい。

(3) 地方の陰陽師・暦算家と土御門家の具体的な交流、支配関係、情報交換を調べる必要はある。土御門家には、陰陽師・暦算家からの諸情報が集まり、情報の集積地となり、そこから地方への分配されていく機能があった。従来は陰陽道の本所による支配の面が強調されてきたが、土御門家の暦学や暦の情報の集積・分配の機能を掘り起こすべきであろう。換言すれば、暦や天文学史上で土御門家の社会的機能を評価することである。

(4) 研究分担者の岡田が専門である梵暦、仏教天文学は未開拓の領域であり、どこの学問分野からも無視されてきたが、資料の発掘が進み、全体像が見えてくるかもしれない。梵暦運動は、太陽暦が実施され西洋天文学が受容されると消滅すると言われてきたが、そうでもなかった。幕末から明治20年までが一つの時代潮流として梵暦運動があった。

2. 研究の目的

(1) 人文学の立場から暦・天文を取り扱い、科学史と宗教史との交差する領域を発見することを目的とする。具体的な例として渋川春海の貞享改暦、土御門家の地方暦算家の交

流、暦の通流制度の変遷、円通の仏教天文学、国学者による暦法論をとりあげる。20世紀末から盛んになってきた陰陽道研究、近代仏教研究の成果をふまえて、科学史が扱ってきた暦学、暦に関して宗教社会史の立場から貢献することが必要である。

(2) 近世の宗教社会史は、1990年代以降朝幕関係論の影響をうけて、本山・本所・頭支配という視角からの制度論的成果を生み出してきた。そのことの意義は大きいものがあるが、近世の思想史的研究とのつながりは希薄である。渋川春海と山崎闇斎、本居宣長の円通批判、平田篤胤の渋川評価など、暦、暦学をめぐる思想家たちの発言は多くある。その点を注目し拾い上げていくと、制度論的宗教史では抜け落ちている思想史的な問題を考察できる。制度史と思想史を架橋すること。

3. 研究の方法

(1) 梵暦に関しては、神戸市立博物館所蔵の須弥山儀図、国会図書館所蔵の梵暦関係資料、山口県文書館所蔵の工藤康海の書写本、セイコーミュージアム所蔵の須弥山儀の調査を行った。暦、暦占書に関しては、福井県おおい町暦会館、国会図書館、東北大学、鹿児島県黎明館、尚古集成館、同県立図書館で史料調査を行った。史料を収集し複写し、史料の分析を行った。

(2) 参与観察の実施。福井県おおい町名田庄で行われた陰陽師の子孫による八朔祭を参与観察し、その後インタビューを行なうことができた。史料保存のあり方を知ることができた。千葉県千倉市の鳥海家では、史料調査とともに関係者にインタビューを行った。近世の陰陽師史料が残っているのが、鳥海家ではその記憶はほとんどなかった。

(3) 概念の思想史的再検討。「科学」、「宗教」、「呪術」は偏向と価値観が反映しやすい語彙である。本研究が対象にしている梵暦、陰陽道、暦占書は、いわゆる近代社会で「呪術」「迷信」のレッテルが貼られ処理されやすい。しかし近世の伝統科学のなかでは「科学」、「宗教」、「呪術」は重複し多義的であるのが実態である。「未分化から分化へ」という発展史的モデルも可能であるが、学知の制度化のなかで、梵暦、陰陽道、暦占書は再定義されて周辺化していく過程として見る視座が必要である。国家神道の成立と、仏教・キリスト教の排斥もまた国家神道の制度化過程のなかで「宗教」が再定義される問題として理解できて、そこには共通の課題がある。

4. 研究成果

(1) 福井県おおい町名田庄において参与観察とインタビューを行った。現在の活動の内容や所蔵史料について話を聞くことができた。

そのことが縁となって梅田、林は暦会館企画展「土御門家と名田庄納田終」(平成 27 年 2 月 1 日～3 月 31 日)の展示資料の翻刻に協力した。土御門家の旧領地であったことから土御門家との関わりは濃く、土御門家当主の下向、幕末の地方陰陽師の動静を知る史料がある。陰陽師は地域では百姓身分でありながらも土御門家配下になることで帯刀が許され、小浜藩の了解を得る様子もわかった。この企画展については暦会館のホームページにチラシ案内がアップされている。

(2)千葉県千倉市の鳥海家に残されている土御門家江戸役所発給の史料を閲覧し、撮影を行った。鳥海家は周囲から「ねぎどん」と呼ばれていたという記憶はこのころが、なぜそうなのかは不明である。近世中期以降、土御門家江戸役所の配下になっており、地域社会の祭祀や祈禱に関わったと想定できる。鳥海家の史料解読について問合わせがあり、NHK のファミリーヒストリーで史料が紹介されたことがあった。房総地域には、所々に陰陽師の史料が残り、陰陽師のネットワークがあったことを予想できる。

(3)梵暦関係の資料調査によって、これまで不明であった開祖である円通の生涯が明らかになった。慈雲、豪潮などの律僧との交流から、戒律復興運動との関係が深かったことを確認できた。超宗派的に梵暦運動が広がった理由も、戒律復興の視点から理解できると思われる。また明治 20 年代の梵暦運動については大阪・堺の商人を中心とした信奉者のグループ、大日本仏暦会社の実態もわかってきた。

(4)近世の暦占・気象占の関する調査の結果、暦占書の分類と内容変化について見通しをつけることができた。『東方朔秘伝置文』『天時占候』『民用晴雨便覧』の内容分析を行うと、天文占の一環としてある天気占と、気象そのものの予知を試みる気象占に分類できることがわかった。後者に関しては観測手法や理論は確立せず、学派形成の痕跡もない。気象観を現す『晴雨考』の書誌データを収集し、近世における「科学」と「呪術」を架橋する知識領域の特質があることが予想できた。近世の両義的な領域がしだいに消えていき、近代西洋科学の受容がおこったといえる。

(5)渋川春海による貞享暦実施について、吉川惟足、山崎闇斎、岡野井玄貞との関係を再検討することができた。吉川、山崎、渋川はいずれも保科正之のまわりにいた知識人であり、日本書紀神代巻の読書を共有していた。彼らに共通していた神代への復古意識が、貞享改暦へのエートスであったことを明らかにした。

(6)貞享暦と朝鮮天文学との関係。岡野井玄

貞は、朝鮮通信使の朴安期に暦法を学んだこと、渋川は岡野井から学んだことの意味を考察した。渋川が岡野井が授時曆に詳しいという発言から、朝鮮天文学を通じて授時曆の情報が伝わった可能性がある。また国立公文書館所蔵の渋川制作の『天文列次之図』『天文分野之図』『天文成象』を検討すると、朝鮮で制作された『天象列次分野之図』をもとにしていることは明白である。渋川は、自らの観測データを使い、星座の位置が動いていることに注目している。貞享改暦において朝鮮天文学の影響を指摘できると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

林淳、近代日本における「信教の自由」、愛知学院大学禅研紀要 44、査読無、2016、57-70

梅田千尋、「暦占書」の出版と流通、シリーズ本の文化史 4、査読無、2016、109-139

梅田千尋、陰陽道祭文の位置、神楽と祭文の中世、査読無、2016、47-69

林淳、自他認識の近世・近代、シリーズ日本人と宗教 6、査読無、2015、3-15

梅田千尋、身分制社会のなかの民間宗教者、シリーズ日本人と宗教 6、査読無、2015、115-141

岡田正彦、梵暦運動史の研究、近代化と伝統の間、査読有、2015、146-167

林淳、江戸幕府と陰陽道・暦道、シリーズ日本人と宗教 1、査読無、2014、82-112

岡田正彦、近代的世界像と仏教、シリーズ日本人と宗教 2、査読無、2014、215-240

梅田千尋、近世神道・陰陽道、岩波講座日本歴史 近世 3、査読有、2014、249-281

梅田千尋、近世本所の家伝と家職、歴史評論 771、査読有、2014、51-62

〔学会発表〕(計 6 件)

林淳、『神道の成立』と黒田俊雄、共同研究「日本宗教史像の再構築」、2016 年 12 月 11 日、京都大学人文科学研究所(京都府・京都市)

林淳、民俗学にとって「潜在的なもの」、ブラジル日本研究学会、2016 年 9 月 23 日、マナウス(ブラジル)

林淳、修験道史・神道史・陰陽道史、陰陽道史研究会、2016 年 9 月 4 日、京都キャンパスプラザ(京都府・京都市)

林淳、近代「神仏習合」の概念、ハイデルベルグ大学主催ワークショップ「日本史における神仏習合」、2015 年 5 月 28 日、ハイデルベルグ(ドイツ)

林淳、日本人と暦、尾張旭市高齢者教室講話、2015 年 8 月 7 日、尾張旭市中央会館(愛知県・尾張旭市)

岡田正彦「梵暦運動史の研究」東洋大学

国際哲学研究センター、2014年7月8日、
東洋大学（東京都・文京区）

〔図書〕（計 0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林淳（HAYASHI, Makoto）
愛知学院大学・文学部・教授
研究者番号：90156456

(2) 研究分担者

岡田正彦（OKADA, Masahiko）
天理大学・人間学部・教授
研究者番号：00309519

(3) 研究分担者

梅田千尋（Umeda, Chihiro）
京都女子大学・文学部・准教授
研究者番号：90596199